

上質で優雅なシルクドレスで本物を追求 圧倒的なこだわりで日本女性を美しく

〈お話を伺った方〉
ラ・クチュール ヨシエ
代表

山下 芳枝氏



豊富な経験と高い技術
良質な素材にこだわった
ハイエンドドレス

イタリア製シルク 100%のミカドシルクを使用した格調高く上品なドレスがそろそろ、ラ・クチュール ヨシエ。最近ではレンタルの割合が9割近いそうだが、オーダー店ならではのドレスの美しさ、きめ細やかな接客が厚い支持を得ている。もちろん、アトリエ立ち上げ時からの強みである完全オーダーメイドのドレスを求める花嫁も。「いろいろなショップを回ったけれど、友人が結婚式で着ていたドレスの美しさが忘れられず、こちらのドレスだと聞いてきました」と語る花嫁も多いそうだ。それほどまでに「美しい」と言われるドレスは、デザイナーである山下芳枝氏の豊富な経験との中で培われた審美眼、ドレスへの熱い思いから生み出されている。岡山で縫製工場を経営していた父に影響され、幼い頃から洋服が大好きだったと語る山下氏。中学生のころから洋服を作り、高校卒業後は洋裁学校へ。21歳

最高級のミカドシルクをはじめとするシルク素材 100%にこだわり、花嫁の体型に合わせた立体裁断で美しいシルエットをかなえるラ・クチュール ヨシエの山下芳枝氏。東京・恵比寿にあるアトリエには華やかで高品質なドレスがずらりと並び、デザインから縫製まで知識を備えたスタッフがそろそろ。オーダーメイドドレスの作り手として 25 年間愛され続けるドレス作りへの思いと、訪れる花嫁の声をお聞きした。

で結婚を機に上京。10 年子育てに専念した後、親せきが経営するフォーマルのアパレル会社に入社し、立体裁断を学びながら、30代から既製のキャリアをスタートさせた。
「テーラーのスーツなどフォーマルなお洋服は一通り作ったのですが、ドレスが最も好きでした。原宿にあった高級オーダー店に6年勤めて、ワンピース1着20万ほどのワンランク上の服作りをしたのがいい経験です」
丁寧で高い技術を持った山下氏の評判は広がり、日本を代表する御三家ホテルの自社ドレス部門から依頼を受けて、オーダードレス

を作るように。当時はドレスといえばポリエステルしかない時代だったが、「上質な着物を着た後にシルク以外のドレスは着たくない」という要望を受け、シルクだけを使ったドレスを作ると決意。その後、国内の有名メーカーからも声がかかり、フォーマルのデザイナー・パタンナーも務めた。
そうした活躍の中でも、「サロンを持ちたいという夢を長年諦めきれませんでした」と山下氏は当時を振り返る。

目指すのは「白無垢」の品のよさ
いいものを作ることに
妥協はしない

そんな矢先、友人が展開するブティックの洋服をオーダーしに行くため、パリとイタリアに旅をした山下氏。観光をしながら多くのファッションショーを見た中で、ある日イタリアで最高級のドレスに出会う。
「猛烈に欲しくなり、どうにか日本に連れて帰りたいと思ったのです」
それをシルクで作ってもらい、自分のサロンに置きながら、オーダーメイドのド



花嫁の楚々とした美しさを引き出す、品のあるデザイン。ビスチェタイプのスタイルにはドレス素材と同じレースで作製したチョーカーがラ・クチュール ヨシエの特徴だ

レスを作っていこうと決めた。50歳の時だった。

そうして長年の夢をかなえた山下氏がこだわるのは、第一に、生地もレースもフランス製やイタリア製の最高級のものを使うこと。会社を大きくしないかと問われることも多いそうだが、それよりも質を追求したい思いが強いという。

そして、「日本人が美しく見え、お辞儀をしても乱れない、白無垢を思わせるような品のあるドレスを作りたいんです」と語る通り、デザインはあくまで上品に。オーダーの場合には十数カ所にも及ぶ採寸を行ない、特にウエストの細さの見え方にはこだわって、立体裁断でシルエットの美しさを追求する。

「シルエットの美しさ、体に沿った着心地のよさは、レンタルであっても妥協しません。花嫁さんの体にぴったりと合うようミリ単位でお直しを行ない、つまんで縫い込むだけでなく、場合によってはほどいて縫い直すことも。レンタルドレスすべてを丈上げまでして美しく仕上げるので、ヒールの高さを選べることも喜ばれているんですよ。これもオートクチュールのアトリエならではの思いです」

日本人の肌色に合い、格調高い場で品よく見せてくれるのは自然な生成りのシルクだと山下氏はアドバイス。

「ただ、花嫁さん自身は生成りのシルクがよくても、純白のドレスを娘に着せたいと願う親御さまも多いもの。以前純白にこだわることがゆえにミカドシルクを諦めて、ポリエステルを着られた方がいました。それを機に、イタリア製のミカドシルクで純白のドレスも作るようになりました」

流行に惑わされることなく
世代を超えて愛される存在に

アトリエを訪れる花嫁は、提携のラグジュアリーホテルからの送客のほか、口コミや紹介もとても多いのだそう。
「日本人の花嫁ならではの楚々とした美しさを際立たせるドレスは、おばあさま、お母さまのお望みもありますよね。花嫁衣裳はやはり特別で、花嫁さんにもここまで育ててもらったという思いがあるの



純白のミカドシルクで仕立てたウエディングドレス。すべてジャストフィットで編み上げはせず、クルミボタンを用いたバックラインの美しさが際立っている

で、ご期待に応えたいと考えられるのでしょう。一方で、若い花嫁さんご自身の希望で、白無垢、打掛を着て、ドレスはラ・クチュール ヨシエのものとおっしゃる方も。本物のよさを分かっていただけのはうれしいですね。世代を超えて脈々と受け継がれていくものもあるのかもしれません」

気になるのはインポートドレス人気の影響だが、「お客さまが減った感覚はない」と山下氏。それよりも会場からドレスの持ち込みを制限されることの影響の方が大きい、「このドレスが着たいので、会場を変えます」という花嫁もいたそう。

Instagram がドレス選びに大きな影響力を持つ中、試着時の撮影はお断りしているのも、山下氏の思いがあってのこと。「ドレスは花嫁さんのお顔が初めて初めて成立するように作っています。試着時の写真って、皆さんお顔を隠してアップされますよね。ドレスにとっても花嫁さんにとっても不完全な状態で発信するのが嫌なんです。時代に合っていないのかもしれないのだけれど」
そう優しい笑顔で話す山下氏は、流行に惑わされずに本物を求める幅広い世代から信頼される。その確かなスタイルと温かな思いは、今後も次世代の花嫁へと受け継がれていくのだろう。

山下 芳枝
Yoshie YAMASHITA
岡山県で縫製工場を営む両親のもとに生まれ、幼い頃からミシンで洋服を作る日々を過ごす。高校卒業後は洋裁学校に進学し、21歳で上京。フォーマルのアパレル会社で立体裁断や既製服を学んだ後、デザイナー・パタンナー経験を積みながら高級オーダーメイドショップに勤務し、ファッションの最高峰を学ぶ。質の高いオートクチュールの魅力に心引かれ、1994年に独立しウエディングドレスアトリエ「ラ・クチュール ヨシエ」を立ち上げる。http://www.yoshie.co.jp